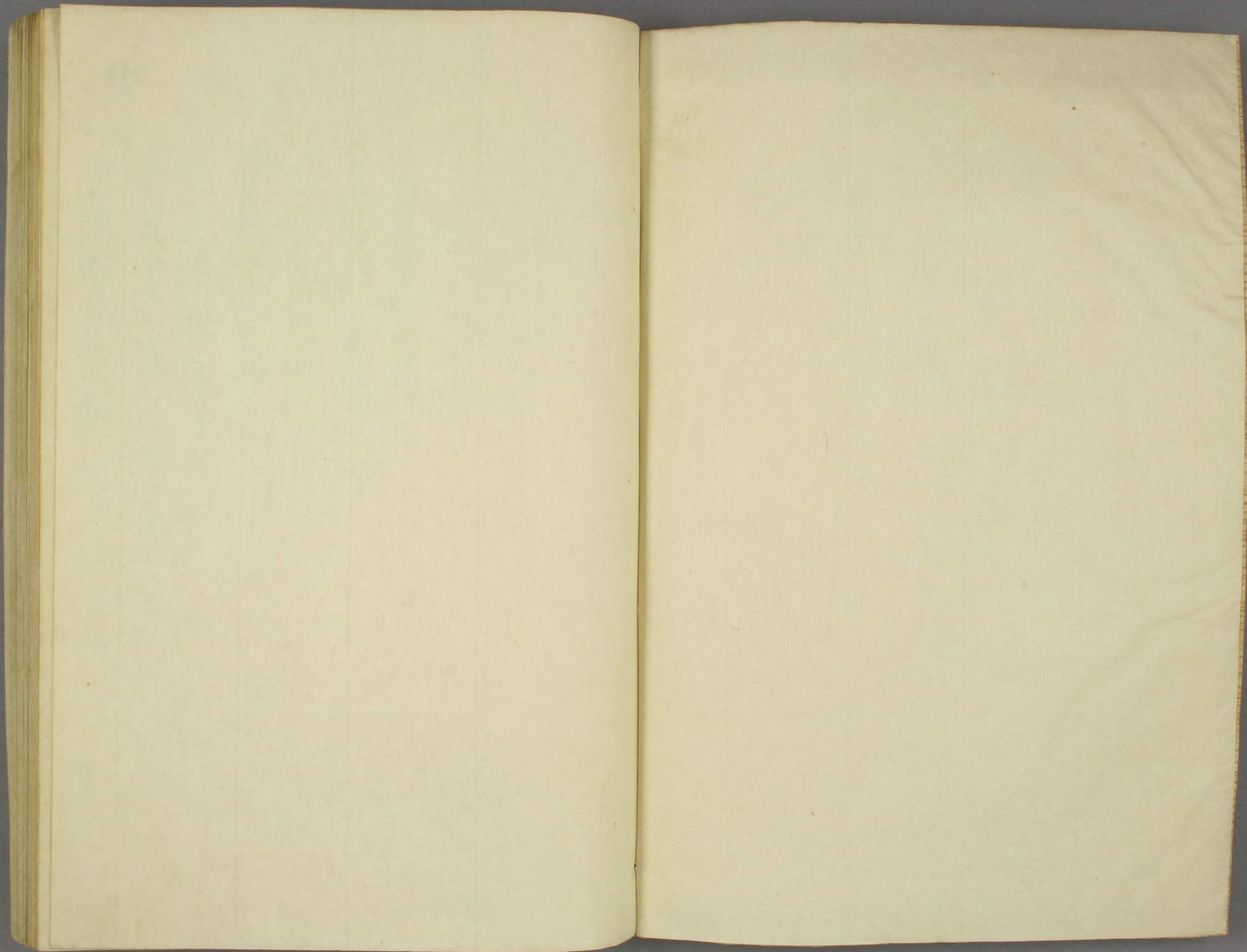




平家物語考證
二

U 5
814
3





門 5
號 814
卷 3



平家物語考院目錄卷之三

- 才一 ゆきしぬる事
- 才二 あしりの事
- 才三 古き人乃まき
- 才四 公の事乃事
- 才五 大塔建立乃事
- 才六 秋高家の事
- 才七 少将部乃事
- 才八 少将部乃事
- 才九 少将部乃事
- 才十 少将部乃事
- 才十一 少将部乃事
- 才十二 少将部乃事
- 才十三 少将部乃事
- 才十四 少将部乃事
- 才十五 少将部乃事
- 才十六 少将部乃事
- 才十七 少将部乃事
- 才十八 少将部乃事
- 才十九 少将部乃事
- 才二十 少将部乃事

中九 醫師もんく事

中十 むゆん乃事

中十一 燒籠乃事

中十二 令りく事

中十三 法系りん事

中十四 大流派の事

中十五 伊きく事

中十六 法自せん乃事

中十七 城守の離宮の事

平家物語考證卷之三

松堂閑人四醉生

編

洛陽後学源道格集

羽林中郎將藤原定俊補

ゆるぬ事

七日の日彗星東方不出
又春氣た中事

治承二年正月七日山槐記云今曉巽方彗星出
天文參陣付苑人勘解由次官基親奏之去
年二月十四日出其後不出今曉又出也以於大
史光能曰存事時例被行之時祈之後

可有沙汰也依此事為使參院不取參也
後日少今夜以後又不出之泰親胡后稱彗
星子息亦并時晴非彗星容氣云天喜四
年七月廿八日彗星見于東方中主計頭
師但胡后奏聞陰陽以章親胡后奏容氣中
先例有相論事欽依日教之長程定答
微之將重宗明說教日見為將五日見為重之
原在依之勅申漢書志云彗星其出久者為
其事大之云同申云以久見為重欽以早沒
可為重之由未智僧天仁三年五月彗星出
見之時匡房以申院云伴星早沒之時

災少久見之時安多此間若早沒亦可為公家之傳
慶之由令申云然去今夜夜見之安可少
欽但宗明說可為事欽凡彗星者希代之變除
舊布新之象之本文不載兵喪水旱疫疫謀及
飢饉亦之類隨行夜有其微

補彗似銳及又息遂及春秋哀公十三年冬十
一月有星字于東方公羊字者何彗星也其言
于東方何見于旦也漢武帝建元六年八月長
星出于東方是為宝尤旗之按ルニ歷代天
文志字彗ト赤氣ト品ヲ別ニス然ドモ彗ニ元
赤白黃等ノ諸色アリ

六月一日の日中宮所也やくんがら

治承二年六月一日山槐記云九清時忠中宮權太夫

呂家陰陽頭在憲朝臣於奧亭中宮侍着常

日内、被召少々、今日廿八日宣之丙申云々同

十七日記云今日被召也奉幣使於安藝國伊

都波治社先例今是中宮清産淨祈當五

有者常也先例今苑人中宮大進基親申沙汰也中宮大

走隆秀才三權右中弁親宗朝臣各陣仍復中

宮亮重衡朝臣殿上人為使殿上四位如何

例之由有但有何来士持幣二人後聞廿日使出京云々同

廿五日記云中宮有于度清後云々於清前云

此事被得禁裏開院欽點油小決面小屋宮侍左兵衛尉

被召宮侍陰陽頭十人隨後以賀茂宜憲朝臣主

祝助安倍時晴朝臣陰陽助賀茂海憲朝臣掃部

次安倍季次朝臣天文博士安倍業俊朝臣圖書記

賀茂在室別長權曆博士賀茂憲定前天文博士安

倍隆茂陰陽大允安倍泰茂左京權亮清科範時

後清賸物十前納長柅運之百俵相副有宮侍上

日輩緒番取自其盤所方獻女房了了陰

陽原各賜祿緒長以權少僧於定全被始仍某

師法伴清仲法系于度清後母儀二不内所被致

沙汰之是清祈云々廿七日記云中宮造立如定論

觀音像於六角堂內奉供者之又被請進侍

帳云廿八日記云中宮法子傳年廿六日六波羅殿入居古

時子左傳懷妊當五月月大仍有法者常事初度

也于時因院為自后中宮傳閣內大臣重盛大吏

隆季大傳門大納言邦經右大臣宗盛降參入被候開

權大吏時忠左三位中納言知盛被候甚後所斗也

宮司桓亮維盛大進甚親已上末權大進元經衣

亮重衡朝臣為奉幣使參伊都後修權大進殿上人

宗執大吏進尹範不道也

等兩之人參入母儀二品被候又獻侍帶之後右大

將北方被參之六進甚親末常持笏或人之後稱

可有難事之例大進為侍使也或著衣冠然而依

為五位花合者末常九此人妻教盛卿女去年逝去

雖為周忌內其服過了於子不闕仍為次使在如何

御着常之後典某次和氣定成朝臣衣冠男主親既

持冬仙治子二七粒其畏操業畏之自甚盤所方狀

中將房取之禮付侍帶左方又侍業并杜示物

禁忌注一通姓名書之副進之權大吏於侍前後

申之定成朝臣陣邊占宿所自今日可何假云

閏六月十九日記云中宮侍奉所祈傳正房覺始仍

全剛童子供二品沙汰云同十月十一日入道太相

國被候侍前大吏又被申定孔雀經法日次自

末廿二日可被始仍之由有伴云廿四日記云自

明且可被始乃孔雀經法仍殿上小庇子以爲敷
或姓自仁和寺宮令法橋長尊給今夜禪候可見
法壇所云每日法戒自今日前橋僧正公願系執
之二十五日記云自今夜被始孔雀經法
孔雀經

補高僧傳義淨條下云於東洛內道場譯孔
雀經云々

變成男子此有

補愛染明王本尊トス

古物乃也

補按ルニ物ノ氣物ノ怪而字トモニ至我通又沉

魂滯魄ノ怪ヲナス妖出宗鬼穀子ノ類ナルヘシ當
時人疾アリハ醫藥ニ心ヲ用ヒテ專ラ僧ニ
依テ厭禳ヲ求ム

神子

補冤鬼 巫現ニ使ルヲ云史記灌夫傳使巫
視鬼者視之

談彼院北山付いかにある宗徳天自色と多し字海秘
左府僧官贈位をこふり水て大政大臣正一位をく
か

此事在于治承元年九月今言為祈中宮之産
難行之者誤矣

元赦カレメハ大赦ナリハ唐私鑄錢ニ至マテ
コトクウ赦スハ非常ノ赦ナリ

入及相國のゆるしぬき出てそとふてく

允大赦用詔書今言清盛與赦書者可疑
矣

補按ルニ赦詔下ルトキハ偏ク天下ニ頒布
ス是時况ヤ非常ノ赦ナリ詔書薩摩ノ
國ニ到ルトキハ國司管内ノ流人ヲ催カソ
悉ク途ニツカシムベシ誓留スヘカラス清盛
別ニ私ノ書ヲ遣スハ俊寛ヲソ途ニツカシ
メジトナリ清盛私憾ヲ以テ詔制ニ戻ル

不臣ノ罪大ニナリ

あはれし事

丹左衛門のせし

補丹治比氏カ丹波氏カ左衛門尉タル人
ナルヘシ按ルニ允ノ同官ノ人ヲ呼分タシ為
ニ氏ヲ上ニ被ラシム藤左衛門源左衛門
ナト云類ナリ又同官同氏ノ人ヲ呼分シ
為ニハ太郎次郎ノ行ヲ首ニ被ラシメ或ハ
莊号在名ヲ以テ呼分ツナリ

礼紙

補本紙ヲ外ニ同ニキ紙ヲ二枚卷カサ子

タルヲ禮紙ト云其ノ事ヲ重ニスルカ故ナ
リ常ニ書簡ニテモ立文ノ時ハ禮紙アリ
折文ニハ礼紙ナシ又同紙ヲ用ニ別紙ヲ用
フル輕重ノ品アリ

九玉の地まてつけてふ

補雜々拾遺ト云書ニ俊寛が九列ノ地ニ
テ終ル事ヲ記セリ猶考ベシ

松浦さよ姫をあらとて身をたてまつひまほりえん
小見よ八道一と地をん

歌林良材集云

をばくつさよひめつまこひよ日れふりより

おつ山の名

右欽明天皇天武天皇御代比古遠唐使より
こし冬後しちり時をまよふとて松浦山
よのりりてさぬのいさを始りま身をまほりよ
てそれより山をいさぬ山とて山を侍りその事を山
上信良らよめり彼人遊和の事系系集り
あまうとつり松浦山を肥前ふみあり
壮る息をるかいんせんへをふをれんちあり

補早雜速離ハ觀音執力至ノ因位ナリト云説
觀世音菩薩淨土本縁經ニ出タリ
但此經古ヨリ傳テナ
リトス用テニ是ニ
九玉ノのまじの事

可改用意。由作合所法書也。予而付以權大
夫曰依可假官事不能冬內可被假他上之者
以權大夫覓其文於殿下。宣次申上。御事被修云
於此官可作下不可假上。御者予申云可被免散禁
許有主例可被免獄。因上御猶可冬內之勘文令大
夫奏。質法皇即返給。作云。圖白可被計免散禁許
也。頭權大夫申此旨於殿下。有御凡點權大夫
授予重犯。而三人申許。其次令殿下云。此事在早
連可被修下事之奏內。裏之間及進。須且下。知官
人如何。以權大夫申殿下。改云。且下。如何事。皆
亦仍召明基於南階下。勘文作云。依為中官。中產

濟祈禮七佛。某師法免給。因基退候。東遣水邊。注也
因未賜奉。行官人。未令免。合十三人也。此後召取勘文
付以權大夫。地參內裏。奉覽了。即歸來。參返下
不被合墨點。又不書端書。仍示權大夫。又令書之
下。明基。今度免物。大概依七佛。某師也。但其所法。除
御產期。已混合之儀。欵依御產。被行非常。教事。保
安三年。一不堂。天治元。通仁。同二。若仁。大治四。清堂。保
延三。八條院。同五。近衛院。亦欵。大治二年。法皇。降誕。給
之時。有免物。充為吉例之官人。未自。今朝。祇假。非使。廳
催。或祇候。本宮。之軍。或依。禪門。命所。奉之。右大夫。尉康
綱。左尉。章貞。盛澄。右尉。基廣。左志。資成。本宮。屬。右

志明基重成亦之已上皆着布衣乃令拂东言難人皆盛
 澄基廣令候遣水辺明基又持叅高文之後在此所令候
 西中門大尉季貞立烏帽子在東泉進禪門近習者也不
 加催他廷尉未
 此云云平安白子所誕生より云々八幡平聖大原聖乃人
 之云云路あり云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
 是云々云々云々云々

又云有侍立願事大史於侍前被書師檀紙有書紙

書授無侍諱書

立申大願事

- 一可參詣石清水事
- 一可參平野社事
- 一可參日吉社事

右大願所立申如件

治承二年十一月十二日

賜所紙書於法平全言太進基親授磬其堂并控一授
 法印駐者候提殿名入公藤中可之啓白侍願書由出
 返聲於基親宿

神社大神宮を奉り申す事あり廿餘ヶ不仁寺八東大寺真
 福寺以下十ヶ所へ由下也候事

又云侍侍誦經用白布禪門石段二京云著目使異諸

人後者亦奉神社佛寺亦

神社四十一ヶ所

石清水 賀茂上下 松尾 平野 稻荷 三所
田中

春日 大原野 大神 大和 龍田

住吉 日吉 梅宮 吉田 廣田

祇園 北野 貴布祢石上院 冷泉
院内 崇神院

宗形 大將軍堂 京極寺 今熊野

白川熊野 今日吉 法興院惣社 法成寺惣社

宇治離宮 北野今宮 橘逸勢 穀倉院内八幡

朱雀院石上法輪一居士 木嶋 今西宮

東光寺

佛寺七十四ヶ所

東大寺 興福寺 長谷寺 東寺 西寺

延曆寺中堂東塔 西塔 横川 無動寺

園城寺 上醍醐 下醍醐 仁和寺 圓宗寺 法勝寺

尊勝寺 寂勝寺 延勝寺 圓勝寺 法金剛院

蓮花藏院 寶莊殿院 歡喜光院 證金剛院 得長壽院

金剛心院 蓮花王院 寂勝光院 十一面堂 佛頂堂

多武峯 淨妙寺 妙香院 法性寺 極樂寺

法興院 法成寺 平等院 東北院 寂勝金剛院

六波羅蜜寺 同地藏 觀音寺 長樂寺 中山

河崎 觀音院 修奈院 法思寺 河原院

祇園林 今天王寺 清閑寺 珍皇寺 石山
 石間 穴太 鞍馬寺 勸修寺 石蔵
 嵯峨釋教堂 法輪寺 雲林院 知足院 靈山寺
 常光院 圓明院

赤通徑の赤使より宮に依りての申より官の少字をとりて

山槐記云以御衣劔未被奉諸寺諸社侍有官軍持
 御誦經物渡南庭出西中門御衣未美麗誠壯觀也
 者禪門被献欽

補諷誦、使ナリ 御衣御劔白布等ハ 諷誦
 布施物ナリ

狂紋のりりきぬ

補伊勢宗五記云日やうもんは銀ハ三色にて深き
 事ふて 二色を三色四色は深分るるはくも引
 ひやうもんははきんせいありと云

東北産より

補對ナレバ寝殿、左右ニ小殿アルヲ對、屋下
 云妾媵ノ類ニ貴重ナリトイヘ氏正殿ニ居
 ル事ヲ得ズ故ニ對、上ヘト祿スルコトナリ

小松の大屋を根々んせつひろめふお名は了十二足ひ
 せきくあせきくは寛弘又上東門院あうんの時堂殿
 此は了年せきくは例と也

補銀將衣ノ劔ナリ三代實録ニ金銀將衣ノ

叙ヲ賜フ事アリ

補衣笠 蓋ナリ凡ソ柳笠ニ佛經等ヲ

載スルハ硯笠ノ蓋ナリス履ヲ載スルハ履

笠ノ蓋ナリ

山槐記云内大臣被奉馬於諸社涼其時引立

西門外侍等相具恭向所云但大神官御馬

被付在末之祢宜伊津改鴻御馬又被付在末

神云々

大神宮二足内宮二足

石清水一足

賀茂二足下社足
上社足

松尾一足

平野一足

稻荷一足

春日一足

日吉一足

伊津改鴻一足

大御門大納言又被引馬於大神宮

二足石清水一足云々如此之時輒不

被奉大神官也而近年如此於内府

公有父子儀寛弘御堂被奉御馬於

諸社其儀相叶至戸互相者懇志之

餘歎

七仏菜師の法

補詳ニ菜師木願經ニ見タリ

金りうとーれわ

補真言僧云產生ニ必用凡法十

リト

五大こんくわう

補瑜祇經ノ所説ニ依テ白色黄色
青色赤色紫色五色ノ虚空藏アリ

六観音

補止観ニ詳ナリ子手観音聖観
音馬頭観音十一面観音准胎観
音如意輪観音是ヲ六観音トス

一字さんじんふしの法

補金剛畏ノ法ヲ一字金輪ノ法ト云一印
一名ナリ五壇ノ法ハ五大尊ノ法ヲ云
六字加輪

補或ハ六字訶梨帝母ニ作ル六字ト加輪ト云
法ナリ一法ニアラス

八字文殊

補八字ノ真言ヲ用フ故ニ名ク

普賢延命

補普賢ハ顯密ニ通ス發心ニハ亦モ金剛薩
埵ナリ故ニ延命ノ益アリトス

とほれり

補護摩ノ法空海ノ作セル建立護摩軌ト云
書ニ具ナリ

仏不の法より依せりて身亦た其原ありては

の像を作り終る

山槐記云被奉造佛仙木於中門南釣殿廊有供養
件所お寺後經前也
佛前無其取之取也

等身十二面

号伊律波鴻佛正許右兵衛督河
法佛師以命於常兜院造之

片衣不穿右中辨經房經取被劫中務少補寺信昌

次等身不動

白川殿寺法佛師明四寺
衣不加持并依養屏師同上

次等身六文

白川殿寺法佛師同上
原同上加持屏屏師同上

已上二許同時供養京大夫表鏡經取被物

大徳門控佐史長取被物

次等身其屏屏不動

四之尺何法佛師同上
加持屏屏師控大僧於雅寶

補佛二意圖云康祐康俊弟子号東佛許佛子中

僧伽乃勺

于首タル者佛所立專ラ佛像ヲ造ル次ナル者佛師ト

云座光箸ヲモ并セラ製造ス〇其尊拾茲所等ニ詳ナリ

補本尊ノ名ニ贊美詞ヲ加ヘテ奉揚スルコトヲ

云政事談云法性寺入后友なり心地おの阿若梨

房覺至乃族の時僧伽の勺云南堂然聖三師控

現由法王之子云後日件事申出之人ありこれハ法信

云如也僧伽の勺ハを来宗子孫名としあるもの

平小院僧正都門院身行生之後始証言之一書方

の片一王字を初生に成るといふこれ亦摩屋室後

於史多天上殊勸業と云あけら連り也

也本儀前在大納宗盛の室家可被奉るカミ而去先
八月卒去仍此人不被奉也

例降誕之後令奉入領而此人且為奉持伊産間
事自去八月所被奉入也

富士の綿

補東鑑文治五年被奉綿子兩於仙洞是

駿河國富士郡濟物之云

法皇の御せんや

古今無其例

由さんの時西殿の棟よりこころをまらえりけるあり
皇子誕生すより南へあり一色女誕生より北へあり
是ハ心もとされりりれいふよとさるべきあをあら

あをされり

山槐託云自日陰間上轉龍破三分兼破之以麻假結
之落後お令被之

召使持之兼在栴化隨其告可落之由説傳云而誤座也方
不足言事也仍又取上之侍所司盛光相副令落之件龍自江
所有大原渡内膳大炊令用之後復廳於廳破結少属

安信資成相具召使進寄令取之出西中門

依龍云云所産れ時こそかたはるハこそほきるるよあ
らけは龍衣とくはる時のまうるひありとことわらせ給
ハよえはるけ下さばまこととてこせり本説は

大京の里のこころをめ良あり海つき賢持の後よ

いかに人の子をたつておまこといかにあつていかにあを
りさせり

本草綱目故醜蔽之附方引千金方曰胎死腹中及衣
不下者取炊蔽戶前燒未水服即下

按以千金方觀之則徒然草之說有相類因暫採
錄焉然 本邦用醜者厭穢之術而胞衣不下

則自屋上轉之以教其氣實異於千金方治法
也術家有別說平尚可考其取醜於大原野
者蓋以為藤氏皇后也今皇后為平氏而取於

大原野者或因循于舊例歟

掃於既時味といふ老一やみ云々

此事山槐託及或秘託無所見

反倍

陰陽家之義我不知其說

補一云禹步北斗七星ノ象ニ比リ步ヲ移ス

ヲ云ト

関白松殿

諱基房法性寺関白第二子號菩提院関白

大政大臣妙音院

諱師長宇治左大臣頼長第二子

左大臣大炊師

諱經宗京極関白師實公孫大納言經實子

右大臣月輪殿

諱兼實法性寺関白第三子號後法性寺関白

九次好實定

仁義公公季八世孫大炊御門右大臣公能子號後德大寺

源大納言定房

具平親王六世孫薄雲中納言雅兼子也中院右大臣雅定養為子赤松黨之祖也

三條大納言實房

仁義公八世孫八條相國實行孫三條内大臣公教弟二子號三條入道左大臣

五條大納言邦綱

補内舍人藤原良門裔尤馬助盛國子

友大納言實國

實房兄

按察使資賢

敦實親王裔宇多源氏左大臣雅信七代孫為大納言兼按察使資賢多材藝喜長蹴鞠騎馬郢曲深達龍笛

和琴箏

花山院中納言

号 叢祖左相公曾孫栗田禪公嫡子後花山院是之
源中納言雅朝

雅兼第四子定房兄

權中納言實綱

三條内府嫡男實國實房等之兄

友中納言實長

參議真夏十二世孫權中納言實光嫡子号日野民部卿

池中納言教盛

忠盛第三子清盛弟

大徳心督時忠

桓武天皇裔葛原親王十三世孫贈左大臣時信嫡子官至大納言

別當忠親

子景叢祖天承納言君第三子號中山内府

左宰相中将實家

實定弟

右宰相中将實宗

仁義公八世孫按察使大納言公通嫡子坊城内府是也

新宰相中将通親

具平親王七世裔久我内大臣雅通嫡子土御門内府是也

平宰相教盛

忠盛第三子賴盛弟

六角宰相家通

堀河右大臣賴宗王世孫按察使大納言重通嫡

子實難波中納言忠基第二子号六角中納言
堀川宰相敦定

大納言經實孫中納言經定嫡子

大入并宰相長方

内大臣高藤十一世孫大八條中納言顯長嫡子號
八條中納言

右大臣三位俊經

參議真夏十三世孫參議左大辨顯業第二子號

大福寺宰相

左兵衛督重孝

少納言入道信西四男所謂櫻町中納言是也

右兵衛督光能

補関白道長裔民部少輔藤原

白王太后宮大夫朝方

補勸修寺流中納言朝隆子

左京大夫長教

補南家流中納言成範弟補任脩範二作儿

太宰大貳親宣

補坊門流右京大夫信輔子系圖親信二作儿

新三位實清

補左大臣魚名裔從三位長輔子

大宮大納言

補中御門流中納言家成子

大なることありし事

此段事實無所見

振平家ありのいづくにあり

補故事談云六波羅に改入道安藝國司の時重
但し切よは遠言野大塔の間材木を自ら被給る
つとま時志香深に傳出來云日本國と大の島來ハ
伊勢左外宮と安藝に嚴給之を神宮はあり
迷玄之汝遠為國司早可事仕嚴給云、古事
光房を六波羅と申と問々ハ奥院の河原梨とれん
中と云てり記しつゝありようせたりけ傳をば玉司の
外餘人不見し之後神降し此許嚴給巫女は院宣

して云君ハ可至位一位を故去長き、能威後友
大としてともはあり多を院宣云母も、乃當國
古事、果不相をさ

さしをや

補雜掌ハ國衙ノ文書等ヲ沙汰スル者ナリ朝
野群載ニ詳ナリ遠藤頼方モ安藝國雜掌
ナリハシ

あちせんの氣比の家

補延喜神名帳越前國敦賀郡氣比神社七
座

於よむをのいさして

法不う度

補諸國司ニ重任アリ延任アリ重任ハ年限
ヲ累ス八箇年ナリ延任ハ或五年六年限數
ナシ一任四箇年ノ限ヲ延引セリナリ本任限
ヲ累子任限ヲ延ルハ循良ノ吏ヲ民ノ仰慕
スルニ依テ任ヲ重スルナリ又ハ方幹ノ吏ヲソ
其任ヲ延テ國務ヲ經理セシムルナリ後世
ノ如キハ其ノ膏腴ニ就テ土木ヲ役セシガ為
ナリ大ニ前世ノ意ヲ失ス

補御正體ノ神寶ヲ鎮坐セシムル故ニ寶殿
ト稱ス

ひんつうふし

補ヒシツラハ總角ナリ結束ノ法將表抄ニ詳ナリ
上ゲヒシツラアリ下ゲヒシツラアリ但ニ是ニ云
トユロハ上ゲヒシツラナルヘシ
らいりり事

白河院白河位の時京極の大後此在むるは
子ありたり賢子の中名とて在るしあひあり

中宮諱賢子實六條方大臣顯房公長女母權中納
言源隆俊卿女京極師實公養為子延ノ三年入
太子宫同五年為女御承保元年為中宮應徳元年
九月廿二日崩年廿八贈太皇太后

主上の后に在るに御子誕生あるまじく之久しとて
ころ三井寺小くまの僧と申すゆかりかあしを
て云く

按頼高家阿闍梨之事極慮談也

教實親主

承保四年八月廿五日水左記云今上一宮於花山
院近日令煩給是法飽瘡後痢病云就中昨令重
苦給云有種法祈禱之自長多仁法印祈
為便行慶被訪御心地之趣答申宣法坐申了
古左守長季以書狀訪此問事等誠雖細不
能憶記一十六日記云法心地苦給其體似邪氣
俗侶函三讀經祈念聞申案内於法印即波入

坐護心經被祈申織草衣黃栴葉一領匡大智房闍
梨許是前日法祈布施也件法祈今日臨了了
依忠尚法心地苦給殊加祈念然不可祈申由是
送了先以書狀訪良真僧師所慰答於令者無
法由之由已刻許令冬山禪師於貴布祿社是聊
有為具宗子之故奉法帳祈申由云又以
賀茂神主成經奉紅色草衣一領唐鏡一面有甚記
於同社又書出去十三日所立申願可奉造二尺
葉師佛像一昧狀并同廿日所奉始文六葉師如
束係一昧又万曳于像供事等在今日所立申於
貴布祿社可候養心後々卷事彙又可勸修神事

前後相並注藏一經請明亂合後之令其辨說之吉
願祈請之類又可奉造千手觀音像一勝之願只
今所互甲也雖不載願書只今甲其吉事了有布施
畧 陰陽以道言來予問云自當何許清心地若檢如何
古云尚瘴氣候欽明日明後日同辛復清飲者此間
僧徒一兩唱錫杖驚自長仁多法師許以書杖被訪
清心地事吾申自今朝又苦修之有及秉燭懺法
如常又以僧云曰 殊覺 禪令清理趣徑布施各循二
足相次又唱錫杖入夜言佛師覺助弟子令作路二
尺千手觀音像白重下籠一領給佛師了以後章
后行事又云十九日歸方所奉作始三尺子手親世看像

於此家中可奉作之由係了令陰陽師三人修鬼氣
祭 九月二日記云和泉守宗基身云明日欲罷申之
處若空清但求宜清之仍取將鬼俗也者予云是意
清似不宜清之相耳可左右也者未冠許永義園梨
於清前誦法花徑此間神氣附人忽然云祇園貴布祿
等亦崇云云三日託云奉黃牛一頭於祇園而前清
心地之間有佛崇之故之畧午刻許建壇壇設神
主成徑祿兵令來之由未刻許成徑來貴布祿而神
接令相 系銀龍等附伴成經奉貴布祿是此清心
地之間有具察之故之同六日記云系博陸殿君宮
清心地殊令若後土畧馮而清飲人濟之良久

改家未尅許奉十判走馬於祇園是佛前淨心地間令
致崇給之由有其告之故之中知冬博陸殿之博
陸系内給良久功給此間諸山僧未滿者勝院羅尼
呪予奉見若宮御體更無可令存給之氣色博陸
系上皇所宮大夫御乳母之悲歎之氣不可陳盡見
者心肝如春而尅許女房亦揚嗚咽之聲成行御非
幸了法年四歲哀哭之至言語道絕予依不可觸穢
念退出

以此記觀之則本書之說不可信

補式部御宇合裔伊賀守有家子園城寺僧
十ノ實相房阿闍梨ト号ス賴高歎カ法力ニ依テ

皇子ヲ誣シ又怒憤ニ依テ皇子殞スト實ニ婦女小
子ヲ妄談ノミ虚實ハ辨ヲ待スノ明ナリ

らいせん

補天下ニ三戒壇ヲ置テ僧尼ヲ度セシム大和國東大
寺ヲ第下ス東國ハ下野國某師寺西國ハ筑紫觀世
音寺是ヲ三戒壇トス其後興福寺延曆寺各戒壇ヲ設ク

一階僧正

海人藻屑云一位二位ヲ言一品二品ト云ハ不經次第解
直ニ至其位言也如言三階僧正ト按ルニ藻屑ノ説ニ依ル
トキハ越階昇進ヲ云ナリ越階ハ一位二位ニ限ルハカク物
語一階僧正ト云ハ一階ハ法印大和尚位ヲ云ナリ某僧

正小称スヘキヲ 越階ニ特恩アルヲ以テ一階僧止小称
スルモノカ

良真大僧正

補充孝天皇齋讚岐守源是輔子

十二月八日此の皇子东宮ニシテセム小僧ニシテ此の内大臣
大主ニシテ池北中納言朝盛ノ下ニシテ少シ

治承二年十二月十五日或秘記云朝間雪降午後天晴此日有册命

立太子又云傳從位藤原朝臣經宗大主止位午朝臣宗盛

補盛衰記ヲ按ルニ十二月八日王子親王ニ立太子ト云盛

衰記月日記同ノ物語相違セリ又公御補任考ルニ翼年正

月宗盛大主ヲ辞ス推中納言藤原兼雅大主ヲ兼ヌ

少納都久りの事

こそんらいりう

補観無量壽經ニ詳ナリ

行貴せきせ

補榮花物語ニテ今於此處ニテ叙ス

おはくる仲よきと墳墓ノメケリノ垣ヲ云鳥井

釘貫ト聯子云キハ瑞籬ヲモ釘貫ト云ナルヘシ

桃李不言春幾暮 燈籠を誦苦難極

菅三品山中有仙室詩丹竈道成仙室靜山中景色月花低

石床留詞嵐空拂玉案拋林鳥獨啼桃李不言春幾暮

煙霞無跡昔誰極玉爲一去雲長断早晚笙聲歸故溪

海よりよのたれおのふせありせり

補後拾遺集春部出羽辨

鶴の踏の山

補本朝文粹紀齊名詩序僕夫侍衛雞籠之山欲曙
宰相の中羽也

補建久元年參議ニ任ス右中將如元云

あゝこゝろしほくらりの事

あをのみこととせりける

補盛衰記ヲ按ルニ僧都ノ當初世ニ有ル時幼
少ヨリ召仕ケル童ノ三人粟田口邊ニ有ケルカ
兄ハ法師ニ成テ法勝寺ノ一ノ預也二即ハ亀王
三即ハ有王トテ二人ハ大童子也云々

こゝろしほくらりの事

補曆史ヲ考ルニ遣唐使ノ發遣ハ四五月ノ除十

リ高活ノ船モカクノ如クナレベシ

法阿修羅等故在大海邊

補名義集阿修羅翻無端正云々四種ノ阿修羅ア
リ法苑珠林法教等考ヘシ

法勝寺のちりき

補法勝寺ハ白河院ノ御建立承曆元年供養長
行幸アリ法勝寺ノ總檢校ハ仁和寺御室之
ヲ兼ラル又別當ハ天台座主之ヲ兼スル事明
雲ノ條下ニ見ヘタリ執行寺中ノ雜務ヲ掌
ル者ナリ

順現明生順後業

補四種業報法苑珠林二詳ナリ

こがさ

補續故事談云云と云病の病國を
つててそんつりやてまの病

人の親りたるやふあふ病をもふをねふまのよひぬるれ

中納言兼輔之歌也

補後撰集雜部

白月黒月

補西城記云初一日至十五日為白十六日至三十
日為黒

茶毗

補名義集此日焚燒

及久十二のころあやにあり

補系圖ヲ按上俊寛カ子俊玄法眼ニイタリ玄カ
子真仙権僧正ニイタル女子二人アリ長九者中
宮権亮源雅妻トミカレハ物語ノ文系圖ト相違
アリ

あふれ法能多

補大和國、国分尼寺ナリ法華滅罪等ト称ス
つらねの事

同き古月ナテの年此とくふり高申ふつち風鷲しう吹る

人全か得く顛倒也

按此事在于治承四年今誤為三年之事

治承四年四月廿九日明月記云未時許雹降雷鳴先
西三聲之後霹靂猛烈北方煙立揚人祇燒亡是曉也
京中騷動云拔木揚沙石人家門戶并車亦皆以上云
古老云未少如此事亦秋宮也奈殿殊以為之寂小壺
梅折露根外件折懸簷破壞榱右中糸二糸京極家
又如以之同五月一日記云糸每宮訪平健亦前在
抱娘室心中又不存可存命之議之檜皮公教庭
上被損非口可宣

補本書明月記ヲ引テ治承四年四月廿九日

ノ事トス長明方丈記コレ同ニ物語ノ年月甚謬
レリ南越志ヲ按ルニ颶風常以五六月發外屋楹樹
云々

醫源問答此事

いんり

補紀伊國ノ名所ナリ和歌多ク詠セリ

志やう名此下ふらぐと字此云々

補淨衣、制縮布而様ナリ薄色ハ桃花色染葉ニ
タテ此染又キ白櫻塵將衣束抄表服ノ條下ニ狩衣
平絹鼠色云々薄色ノ衣ノ白キ狩衣ヲ隔テ、
水ニ濡タルカ凶眼ニ似タリト云ナルベシ

客或入延内侍宴會未可為失而天子面過接之者 寬平皇帝所戒也 寬平遺誡曰外蕃之人必可召見者在堂中見之不可直對耳季環朕已失慎之益親王以下至諸臣則不憚相見矣三代寶錄云仁明天皇嘉祥二年渤海國入覲大使玉父維望見光孝天皇高明親王在諸親王中拜起之議謂所親曰此公子有至貴之相其登天位必矣

かみもつばかいたる

補名義集耆婆此曰能治

老とくは節の書を云く

補醫針案摩呬禁、四部ヲ云カ

たしひ又五條のせりよる

補延喜典式ニ大素經新修本草小呂明堂

八十一難經ヲ五種、醫經トス

八月一日の日月んちる正念をらるしてらせまひぬ

百練抄云治承三年八月一日入道内大臣重盛公

亮入道前大政大臣嫡子武勇雖執時輩心操

甚穩也去頃參熊野有祈精

おもんのかさしん

大匠のころの時ちるむゆの大刀あり

延喜弔正式云九畫劔太刀五位以上聽之畫劔

太刀者劔鞘施蔭繪也凶喪之時用黑漆無蔭
繪者五位已上皆然矣此書所言是乎但持言葬
大臣之時帶之者不詳

此段無可註者

東山の蘇四十八人此精舎

補盛衰記ヲ按ニ重盛常居地ニ就テ十二光
佛ヲ安置スト今マ京極綾小路淨教寺ノ佛
堂ヲ傳テ燈籠堂ナリト云實否未ク知ス然
三五條東洞院ノ故地ヲ今ニ燈籠町ト稱ス

大念佛

補融通大念佛ナリ大原僧良忍ノ所創ニシ自他
融通唱名ノ義ナリ良忍ハ天仁中ノ人ナリ重盛ノ
時世ニ當テ領信ノ徒多カルベシ婦女ヲ命ノ行道
唱名セシム佛事ヲ以テ娼戲ノ如クス可笑シカレトモ
古ハ藤原道長ノ佛事ヲ修スルニモ此ノ如キ事アリ
栄花物語ニ見タリ
令わ〜此事

此段實否不考得

安えの妻此

補文献通考日本ノ條下云淳熙三年其國
人從海道風飄至明刻無口食詔給之

又有百人行丐於市至臨安支給津遣往明
刻養贍候有使船發向本國云々南宋淳熙
三年ハ本邦ノ安元二年ナリ重盛ノ金ヲ育王山
ニ施ス是比ノ事ト見ヘタリ然トモ通考ノ大飄
流ノ事ノミニ前後ニ他ノ事ヲ見ズ

法系の答は子子

補按ルニ市舶ノ綱首ナリシカレハ市舶便憑
ヲ財施ヲ遣スナルヘシ宋國史ノ其事ヲ載サル
天是故ニヤ

佛照禪師德元

補明高僧傳五燈會元等德元力傳ヲ載ス

法系の答は子子

同キ上月七日此地成刻大地震

百練抄云治承三年十月七日成刻大地震

南々之經

補朝野群載ヲ按ルニ陰陽得業生讀書黃帝
金櫃經一部周易一部ト曾テ安家ニ陰陽
道生經ノ目ヲ尋子ニ金櫃經周易外
三經ト云目ナシト云リ

いろち乃おちりマシクるト云リ

補續故事談云祇園の松燒失の時々
とこならずニ陰陽師素親らるるいろく

中云六月十五日内書焼失あり一六
月十六日壬子古法内書衣かけより有首
れりといひくちを文と云らるる十中一
て七あるを神と云ふ親の七あると云ふ
とらるる○百練秘取安四年六月廿二日

雷宿素親朝臣宅

同日子十甲入及相国いづくもあまのりん
はせんとの軍兵をたふひいづく怒り入りあまのり
あまのり京中何とて分るるなるれとも上
下さるるあり

治承三年十一月十四日或秘記云今日入及相國

入洛宗盛以去十日首途合衆嚴防而自詠呼送相
共上路武士数千驛人不知何意凡京中騷動甚
今夜出仕雖非不忠為勅公事出仕不可有横災
中源存忠仍企集任し其果以之為凡洛中人家
運資財於東西諸物急礼世に至る

十五日入及相国於家をうらまきり必定と云ふ
一は法皇大少なり色をひて故少納言信孫の志
志やう久し法皇を由使し入及相国のりつらさる

百練抄云十五日世上間激し武士隔洛中入道大相国
奉怨公家率一族可下向鎮西に由風閣上皇以法師
静賢自余以後萬機不可有御口入に由被仰遣之

又云或託云上皇子因白可令減年家黨類之由有
密謀之由有其因其上師家以超二位中將任中納
言其林林云々

惣別

補総別ハ佛書ノ會釋ニ出ツ總想念處別想

念處ナト云カ如シ總別ニ付テト云トキハ總ノ云

トキモ分別メ云トキモカクノ如シト云心ナリ

淨海ウヤ不ヒク事ク云々

補定俊按ルニ保元平治ノ除重盛切ナシト

云ヘカラス然トモ社稷ヲ安シ宗廟ヲ奠ル

モ人臣當下ノ務ニシテ分外ノ事ニアラス豈誇

張スヘケンヤ又今文云右大臣以上若散一位喪
皇帝不視事三日ト然レハ定限三日ノ外君
上何ノ諱避スル事アラシヤ越前國莊務ノ事
上白王ノ收公セラル、モ功臣ニ於テ恩礼ヲ闕
キ清盛カ言語ニ殺スルモ不遜ノ至リナリ
中納言閔ノトキ清盛基通ヲ波引ス上皇
却テ基房ノ子師家ヲ奉任セシム師家時ニ
八歳基通ハ二十歳互ニ世家ノ胤ヲ以テ
方幹ヲ擇ハス顯官ニ處セシ事ヲ望ム矢
ハ同ニ基通ハ稍可ナルノミ八歳乳負ノ小
兒ヲ納言ノ任ニ居シム矢、又失セ凡モノ

ナリ清盛權勢ヲ負テ君上ヲ薄クシ甲
兵ヲ輦下ニ動ス罪譴辞スヘカラス然トモ本
ト院中ノ政務ハ旧制ニアラス名實大ニ虚
リ加之今上英明ニシテ傑出ノ主ナリ萬機ヲ親
ラセシメシ事ヲ仰望ス清盛忠志ナキニアラ
ス上皇サキニ信賴ヲ寵メ平治ノ乱アリ尋
テ又成親ヲソ變テ釀セシム禍乱止マルヘカ
ラス清盛が跋扈モセコトヲ得ナルナリ天
下ノ危難ヲウレヘテ不臣ノ名ヲ蒙ル大不幸
コレニ過タルハナシ然レトモ重盛ヲ存セシメハ
此ノ如クナラズメ調護スヘシ父子ノ間優劣ミ

ルベシ

大伴流罪の事

同ノ事ナクハ入在相述ハハハハハハハハ
後をそめたりて改大伴流此ハ相モ客四十三人
官職をとりありをいそめたりて中ハ元白殿をハ大宰
の師よりつて法ぬへて地あり

同十五日或秘記云世間物志無極云々
刻人傳云天下大友出来云々不圖
刻大ま史隆職住送云
関白藤基通 内大臣同 氏長者同 止園白藤基房
止權中納言將不 同師家上 權中納言雅頼 職事 中宮

檢亮通親詔書 宣命等檢并兼光作之 余披
見以狀之受作王伏地 狹以不信受等致非等 欣在
取并存以事由來去 法皇收以越前國 叔入及内大臣 知内国
臣傳之 并被補白川殿舍領 兼威 人以此上每更
法皇臣急云 三位中将師家城二位中将基通任
中納言師家年僅八歲 等今無例是博陸之罪科也
允此外法皇亦博陸同意被乱國政之由入道相國
奉詔云 然之間昨日夕禪門卒教千騎隨兵入
洛之 後天下教騷洛中 遽動故不可云 今口及曾
黑甲宮東宮每宮忽欲幸八条亭 自被奉相具可
赴然西之方 由凡守已每宮行路供奉法司出

車已下集禁中騷動云 宣禪門使重衡刻后
奉内重衣之 迫可走傳偏以委置是朝政之務不可
安諸世有蒙罪科之 陰悔而可無益不如獨身出隱
辰進地仍為有具而宮取催儲行啓也者 忽遣勅
使被作此儀可被行 之狀即以此云 已下有詔書
宣命等之 汝法云 其實自今且右物軍及君列等
使之 國家之 數日宮部誠以此言

天皇我詔旨 長方 勅御命手 親王諸王諸臣
百官人等 天下公民 恩問食度 宜從二位藤原
朝臣者 功臣 乃子孫 度志 朝思守 可蒙 支人 奉
依 内大臣乃官方 亦 任賜 布 勅 衆問食度 宜

治承三年十一月十五日

上卿源大納言雅賴

作者權右中弁兼光

詔朕以渺身之冲昧謬受聖人之大寶臨衆海而
誣謂難辨只任利涉於元凱之舟理政道而安
危易迷回馮扶持於聖賢之教內大臣藤原
朝臣苗緒于功臣藻鑒于衆庶姬且曲阜之
風遺韻傳家漢霍博陸之月餘輝照性懋
帝之載非公存誰支萬機巨細有官終已皆
闕白於內大臣然後奏下一如旧典庶叩无二
之聖永施含一之德布告遐迩俾朕意主者
施行

治承三年十一月十五日

十六日記云卯刻陸職宿祿未余密在簾前問也
上奏告如風雪依男殊有其恐他不對面也於外
人志不不然凡百作家中男女令禁言祭誰言等
令且奉書於前博陸報狀云年本無憂故申
承本言儀尚此作銘心肝先世之宿報不誠左右
今一度不見系儀之口惜儀云云據以狀之交拜
心必磨以人年及百在會款支甚多陸於此也
下支多身彼脣响臨氏時今一度面降中心不慮
也而下官依以事自令怨心歎之由有不推察歎
忽仍向彼第忘似有謀議為自他之用之上諸以

武士遍滿上下容易不能住還就中波殿造武士
与護之仍多有患之故也思不余謂其如會然
悲哉云云申刻定就其來院造更如令其在閑子於
世間亦法伴山了昨日以法印靜賢力水使而夜被陳
子細多其後頗喜似和氣然其於又有可被擲虎
追臣等之由德齊多之九道日之卷說能極量極存
一定死拒此因白之時家貼孤璞職付大疵於元
代者天子之位接緣臣大以在君之新博陸降送
使更長勉臣為道不說之恐也是諳神之甚之在
夜明雲還任僧正并天台座主云云
前僧正明雲

還任 上以檢中細云 左少并光雅寺奉行之

還補座主 大内託業實旨進 宣命 勅使少納之惟基

賞快親王

禪退座主 口宣也

治承三年十一月十六日

天皇我詔旨山中乃法師尔白佐倍宣勅命乎
白僧正法印大和尚位明雲波年膺高我上仁
覺快法親王乃禪退代尔重了慈覺大師乃明徒仁
之天真言止親乃業乎兼羽日利故是以座主尔重了
任賜布夏乎白佐倍乎宣勅命乎白

治承三年十一月十六日

平杖行

上總守友為保

右少將源雅賢

除自

右中辨藤兼光

左少辨藤行隆

右理大夫平經國兼

大膳大夫藤河綱

右侍(督)藤實家

加有守藤保家

藤信威

左衛門伏常陸守高階經伸

檢右中辨藤光雅

大藏卿友隆兼

東宮大夫藤忠親

右近衛中將藤隆房

右兵衛督藤家通

治承三年十一月十七日

正三位藤基一

從三位藤賴實兼

穀倉院別當清原賴業

殿下

兵仗士 正三位 已業實奉之

勅授常御士 琴車士

一府士 已上賴業等

上卿藤大納言

從二位藤良一

從四位下藤光雅

治承三年十一月十日

十八日記云宣刻降職任送關書解官輩共九人
除目又被以此中將被叙二位凡亦得其中將

實被叙之不在解官除自叙位等左右今欲又願自
被配流其官此指河清而官申惡之仍被叙在宰權
師有官命云云又去改大臣師長解官被追致圖印

今日又有除目

天皇我詔旨下勅大命于親王諸臣百官人等天
下公民衆聞食下宣

從一位藤原朝臣基一坐受于太宰權帥退給
不天下之人此旨于聞于北德倍志勅大命于
衆聞食下宣

治承三年十一月十八日

右少弁源兼忠

尾張守平時宗兼

相模守藤範兼

常陸守平宗實

越前守平通成兼

周防守平範經

淡路守平清房

伊予守藤兼

東宮權大進藤時光

參河守平知度

上總守藤忠清

美乃守源則清

伯耆守平忠度

土佐守藤成定兼

讚波守平惟時

左衛門尉藤京尚

因忠經

治承三年十一月十八日

從五位下藤忠清

源則清

檢非遣使 宣旨

同忠經

藤原尚

我人行隆

辭退樞中納言雅賴

流人太宰檢原友基

有宣命
配流本國

平業房

被追却問外人

資賢 雅賢 資時 信賢

上心三条大納言 十八日 願奉

勅風雲令契則一天平以有道魚水度切忠四海
靜以無波誠憶哲后之化皆依良佐乃內大臣

藤原朝臣智範倒謀神叶岳障已京累業博隆
長嫡忽居百官惣已之重徑柱石帳用家門之風傳
声執壁揮養邦國之流映仍賜左右近衛府由
各一人也素各已人以為隨身兵仗度歲分衛卒於
霜仗之日博榮輝於里階之下普告遐迩得知朕
之主者施行

治承三年十月十八日

作者大内記藤原業實

十九日記云卯刻隆職又注送閤書依交替後
加昨日記閤白被還百多羽南色云々仍有被行
更云々自松殿被出之旨子細粗似借閤悲淚教行

非言語之不及自今百六日有替奉日社是日
來之致也畧

古日記云天德卯刻入道相國送書於賴浦入道之伴
遽而見之其狀云二位中納殿令但檢中納言并右大將
給候之由而承及催也而聞書令書後候了云々
以此旨有令申給思云々

十一月廿日

静海

修理權太左殿入道殿

余被了は此處先仰天外之他更生候之恥辱
於身候了万変不及沙汰之旨以了出來被塞
余之替候頃固辞也而若辞遁之者忽可當項

斬罪加之聊中心有不在仍只候思之中自書返
報了了不知子細之人不知身之恥在彼所之旨欲
何為云々物言々不堅辞之条論謀之甚之旨可失
生候之切也此是陸後以送聞書被除目云々不細
在右

年別評人傳云法皇御幸鳥羽是代賴
盛之經之波羅市不迫之故而波羅也云々未朝今未
云巴寄六波羅合戰云々凡等欲派受歟未覚悟又
之代賴感支法云々實也

如らん世云々是れり之も有るん云々智羽の意云々川と云
前より此が家云々法年三十五

同廿一日成秘記云 取博陸今日出家云々

廿二日記云前關白昨日出家入道大原一燈人聖德太子
奉授戒之今日被下向之其人上下男女七八人
許之其宅同心出家以誓切被献之為令出家
一定也云云聞此等事悲淚難抑者云

傳少類盛口不領亦併以段官云云又業房配伊
豆國之百於路頭遊覽了云云僅本府者一兩
相見下向之間以交出外云云又頭中將通親朝臣
已欲總之然而者有難免猶懷怖畏云云又關白政
大臣去十九日出家云云又改官一族初越會坂關赴
東國之方面思老山崎之方可赴西海云云存少相
國不出家云云抑昨除日降季師云云古宰相

志親王不任之官也仍他人無時之納云云上知行宰相
之時被任檢師系職天下不被任大貳也而前關白任
檢師赴配所降季令任正師者代之例也降季已蒙
親王之宣告歎乞職事亦有若亡之新政也外記又
不聽之申狀但如付之亂世不可及乞非左在子死
廿四日記云前博陸昨日自向麻被向福原云云下皇
廿六日記云傳少前博陸自福原被向淡路國了
其人只一人強等皆進上了武士等相見約了云云
をん保の人の乃了出家云云

補系圖ヲ按ルニ墓房但依出家移住備前
國云云

た大臣の事

日本純天武天皇元年八月斬右大臣中臣連金於
淺井田根是日左大臣蘇我赤兄等悲配流云々

○補左大臣石川磨ノ第

右大臣考成

續日本紀孝謙天皇天平寶字元年六月甲辰勅曰右大
臣豐成者事君不忠為臣不義我私附賊黨潛忌内相
知權大乱無數奏上及事發覺亦不肯究若急延
日殆滅天宗鳴乎宰輔之任豈合如此宜停右大臣
任左降太宰負外師

○補六月甲辰七月戊午改公へ左大臣藤

原武智磨第一子号難波大臣又号横佩大臣

左大臣魚名

續日本純桓武天皇延暦元年六月乙丑左大臣正二
位兼太宰師藤原朝臣魚名坐事免大臣其男正
四位下鷹取左遷石見云々已知太宰師藤原魚
名到攝津國病發不堪進途勅宜待病愈然後發
遣

補太政大臣藤原房前第五子

右大臣菅系

大鏡云右大臣の世はすれはあてをたか
しむる心ありて事外にあらざりしはた大

後大匠よりあつちあつちの御小僧より後入道より
して右大匠の御お返しするのふふおつちへしつた大匠
也とらうとておつちへしつた大匠へしつた大匠
此所へあつちよりぬる出来て昌泰四年正月廿五日
大宰権師よりあつちよりしてあつちのふふ○参議是
善第一子村上天皇天曆元年北野に初ル

大匠に言明云

大鏡云式部卿の家を冷泉院のつちへしつた大匠
とをあらわすつちへしつた大匠とてあつちのふふ
よよりしてあつちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ

つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ

○補業在御語云さつちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ
つちへしつた大匠とてあつちのふふ

公卿補任安和二年三月二十六日殿大宰権師

即日入道請留不許准俗赴任所云々

内大臣友房の伊周云々

大鏡云花山院の成として云々位と云々世
多ひて只つら此権師ありて長治二年丙申四月
廿四日云々云々云々云々云々云々云々

○補中関白道隆一男

故中夜の成云々

補基實号六條関白又中殿

天祿三年十一月一日此日一条の権政藤原公云々

云々云々云々

補伊尹ハ右大臣師輔ノ一男一條ノ根政ト

号ス薨ノ参河公ニ追封ト謙徳ト謚ス兼通ハ
師輔ノ二男堀川ノ関白ト号遠江公ニ追封
シ忠義ト謚ス從二位從三位ニ仰ルヘシ兼家ハ
師輔ノ三男依病出家スヨツテ謚ナシ所居ヨ
拾テ、佛寺トス法興院ト称ス伊尹薨ノ弟
兼通権中納言ヨリ直ニ内大臣ニ任シ関白ト
ス翼年正月正三位ニ叙ス

長寛二年八月云々云々云々云々云々
正三位云々

公御補住云長寛二年六月廿七日自土佐國被
召還閏十月十三日復本位從二位廿七才又云

長寛三年八月十七日正二位臨時

仁安元年十月よそのの中納言より権大納言よあり
ありおふ大納言あつりたれはうその外にせくはるる
大納言よありたれをいふ

師長仁安元年十月三日任權大納言是時大納言藤原忠
源雅通藤原通平清盛源定房已上五人今任師長
共六人也同十月十一日清盛任内大臣大納言又為五人

補大納言職員令四人其後權官ヨ置ク三條院
長和中正二員權三員合テ五人トス本書ヨ云トコ
ヨ六人藤原忠雅源雅通正官タリ自餘ハ權
官タリ

山階の大納言守也

武智磨曾孫安房守真作第六子贈正二位

補三守承和五年右大臣ニ任ス七年薨ス後山科大
臣ト号ス初天長五年前中納言ヨリ大納言ニ任ス

宇治の大納言隆國

左大臣高明公孫大納言俊賢第二子年月可考

補治暦三年前權中納言ヨリ權大納言ニ轉ス
次弟也

補文武、舉人官達ノ路各別ナリ然トモ將相
ノ任ニ至テハ徳ヲ以テ選ムベシ次第昇進ノ
定格ト云ユト有ヘカラズ

大改大臣中へさへめ云々

補玉葉治承元年三月五日乙巳日有但大臣

事以自大臣師長任大改大臣云々隆職注はる

日但大臣宣命云々此相兼日大臣記不詳案欽祿

朝元老中由即之齡未及四旬欲書累代在公

之中又其父謀叛人也其身蒙罪之人也欽裁

化教代の朝中志是又母宣也改洛昇進

後不歴多程進退相存云々

つとまぐしてそいふの月をえんといふ子を心算さるるの歌あり

右事談云不基中納言若後一条院管長也天皇崩

御之後忠臣不仕二君也云々七、聖忘之後是天

台撰嚴院落飾入道云々其常の時常御自樂云詩

古暮何世人不知姓亦名記為道傍古年、春草

生又云あゝれ身罪死一和の月をうんも也云々巨木系

山交定從生人也注名田昭

○補大納言俊賢、一男隆國、兄

唐の太子賓客白宗天得陽のこれなり云々

琵琶行

補是時江州司馬夕リ文献通考云唐太子賓

客四人宣調護侍從規諫

あつこのめ

補延喜神名帳尾張國愛智郡熱田神社

日本純景行天皇本紀云初日本武尊所佩草薙
横力是今在尾張國牟婁郡熱田社也
ひそひそ

補傳玄琵琶賦曰漢遣烏孫公主嫁昆彌
念其行道思慕故使工人裁箏筑為馬上
之樂風俗通曰推手前曰批引手却曰把
法濁を今て（？）を（？）

補凡ノ音ノ高キヲ清トシ音ノ低キヲ濁トス
呂律ハ六律六呂ナリ黃鐘ヲ律トシ大呂ヲ
呂トス又本朝ノ曲調平調黃鐘調盤涉
調ヲ律トシ壹越調雙調ヲ呂トス何ノ據

云コトヲ知ス

執巴琴を多ん（？）ハ魚鱗あり（？）塵云歌を
た川を（？）塵（？）

補列子云執巴鼓琴而鳥舞魚躍劉向別錄
漢興以來俗歌魯人虞公發聲清哀拂動梁
塵

凡香調の内（？）花（？）の曲（？）

補三五要録ヲ按ルニ風香調ハ琵琶調子ノ
名ナリ竹ノ黃涉調ニアタル又樂府雜録ニモ
風香調ノ名アリ流泉ハ三五要録ニ流泉ノ曲
アリ今断絶ス

福らくんを世そ 又字にころきやうとんきざんなり
あやまりをのり

洛中集記云白居易以所作文章移置香山寺
序曰願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤翻為
當來世之讚佛乘之因轉法輪之緣

まけ時

補資賢四男後白川院近習

高階泰經

補天武天皇皇子高市親王裔若狭守泰重

子

友原にもとらる

補平基親ナリ藤原ニ作ル誤シり冬議親
範子

まろりい

補資賢一男左少將通家子

たうせの判友

補明法博士ニリ檢非違使判官ヲ兼ル者ナリ
仍降たさふ事

中山中納言死時

坊城大藏御為房孫因幡守長隆子

法皇法遷幸の事

此段與舊記所載畧相似而此書附說甚多矣

治承三年十一月廿日或秘記云々 既見于前
百練抄云治承三年十一月廿日太上法皇渡御
鳥羽殿非尋常儀入道大相國押申行之成範
脩範等御法印靜賢女房兩三之外不參入
閉門戸不通人武士奉守護之

法皇御也

補力者僧中ノ召仕了者ナリ僧形ナリ海入
藻屑云力者兼花摘卜僧形中尤微賤ナ
ル者也

あませつ人

補從二位藤原朝子武智磨齋紀伊守兼

永女少納言入道信西室後白川院乳母号
尼前々

十六洛又

補洛又名義集此日十萬又三思至我等ニ詳
ナリ

久んらら比神

補金光明經ニ詳ナリ

さうたい

補三光院内府記宮躰下ハ指貫上ハ如祀
着袈紗衣又海人藻屑袈代俗直衣也

供席

補帝皇所須、諸物一切供御ト祢スベシ何ゾ
飯一事ニ限テ供御ト祢センヤ然トモ所須、
最要ナレバ供御ト云カ海人藻屑云内重衣仙
洞ニハ一切食物異名ヲ付テ召サル、事アリ
飯ヲ供御ト云

清涼殿北いしとのいし

補禁祕御抄石反壇四季御屏風三尺南第一間
母屋御簾下以東為面

故黃門定基御私説石反壇以聖築壇其
高同板敷是准地上有御拜處也

せいあん及びさきさきこれ事

百行の中よはさき

補孝經子曰昔者明王之以孝治天下云々

又孝經玄宗御製序曰雖五孝之用則別而百
行之源不殊

唐堯ハ老ねとらへる冊をたつと云

補帝王世紀云帝嚳納陣豐氏女曰慶都生
放勳又河圖曰慶都與赤龍合生帝堯於
伊祁云々慶都老衰ノ後子帝堯尊事ノ
事未考

君ハ毎辰ハ水

補荀子ニ出タリ

大言の大相國

伊通公

補關白道長齋權大納言宗通子

三條の内大臣

公教公

補太政大臣藤原實行子

藤原大納言

光賴

補大藏卿藤原為房曾孫民部卿顯賴子

中山の中納言

顯時

補前二見へ夕リ

已上四子當時頗有方名元治承中經宗兼實二公
以下實定實房資長忠親雅賴朝方實守家通實
宗長方定能信範等之十餘卿總皆知禮儀習
故事之臣也今唯奉光賴顯時成賴親範者
惟時長為葉室之籍族因特祢其祖乎

成賴

補光賴弟

親範

補從三位平範家子号昆沙門堂入道

氏於以入乃親範小原也其子ともあり宰相入乃成賴ハ
高野の旁より一つ一向後世なり其の外ハ

ふ

公卿補任云親範民部卿近江權守承安四年六月

五日依病出家廿八承久二九廿八薨今四〇成頼

承安四年正月五日出家依并心也法名知成号高

野宰相入道建仁二年十月薨六十七空親イ

補小原大原ニ作ルベシ毘沙門堂記云於大原

極樂院出家法名圓智号想蓮房

せいむの一向より此の如く

補清盛奏ノ政ヲ聖断ニ歸シヨリテ福原ノ

莊居ニ退ク是後白帝心ヲ政事ニ止メテ

萬機ヲ親ラヌ禪位ノ後モ帝ノ幼穉ナル

ヲ以テ大小ノ政ヲ法制ス王葉山規記等ニ見ル

聖壽ノ短促ナル惜哉

大寺はりのゑ

補安樂壽院勝光明院何レノ寺ヲ指カ

あをさしる車此の

補知歌ニ詠スル竹田河原ノ渡車ナルベシ

此の如く目おたかる

補玉葉安九二年三月四日巳酉天晴此日公家

被奉賀太上法皇五十寶篋於東山御所南殿

有此事 世謂之法注寺殿云々

18

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese, spanning several lines on the right page. The text is very faint and difficult to decipher.

